

## 倶多楽火山

### ○大正地獄の熱泥水噴騰活動

2007年5月2日夕刻～3日早朝の間に始まった熱泥噴騰活動は、10月11日の規模の大きな熱泥噴騰後も継続し、現在も噴騰・熱水流出を示唆する湯温変化や地動が観測されている（図1）。

しかし噴騰休止期の最低熱水温度は、40℃（6月頃）から70℃（現在）まで次第に上昇し、80℃前後に漸近する傾向にある。熱水温度は噴騰活動が始まる数年前に60℃前後に低下したが、それ以前は20年以上にわたって80℃前後の温度で推移しており（我孫子、札幌管区气象台）。この温度への漸近傾向は活動が安定状態に向かって終息しつつあることを伺わせる。

また、流出口付近の地形変化も進んだ。10月11日の活動の際には熱水流出口付近が崩壊し、流出口が著しく拡大した。これ以降、流出口付近の河床浸食も進行したように見え、熱水流失の始まる水位は10月11日以前よりも低下した可能性もある（写真1）。

これらのことから10月11日のような細粒砂礫を飛散させる噴騰の可能性は低くなったと考えられる。その一方、地獄谷で知られている異常地熱活動は1～2年間つづいたことから今後も噴騰活動は継続すると想定される。



噴騰活動開始から1ヶ月ほど経過した6月4日の状況。



10月11日の規模の大きな噴騰活動後の10月29日の状況。赤波線部が崩壊・流出し、流出口が約3mに拡大。



2007年1月17日の状況。河床が浸食されて平坦になったほか、河床が30～50cmほど低下したように見える（赤丸内）。

写真1. 大正地獄流出口付近の地形変化

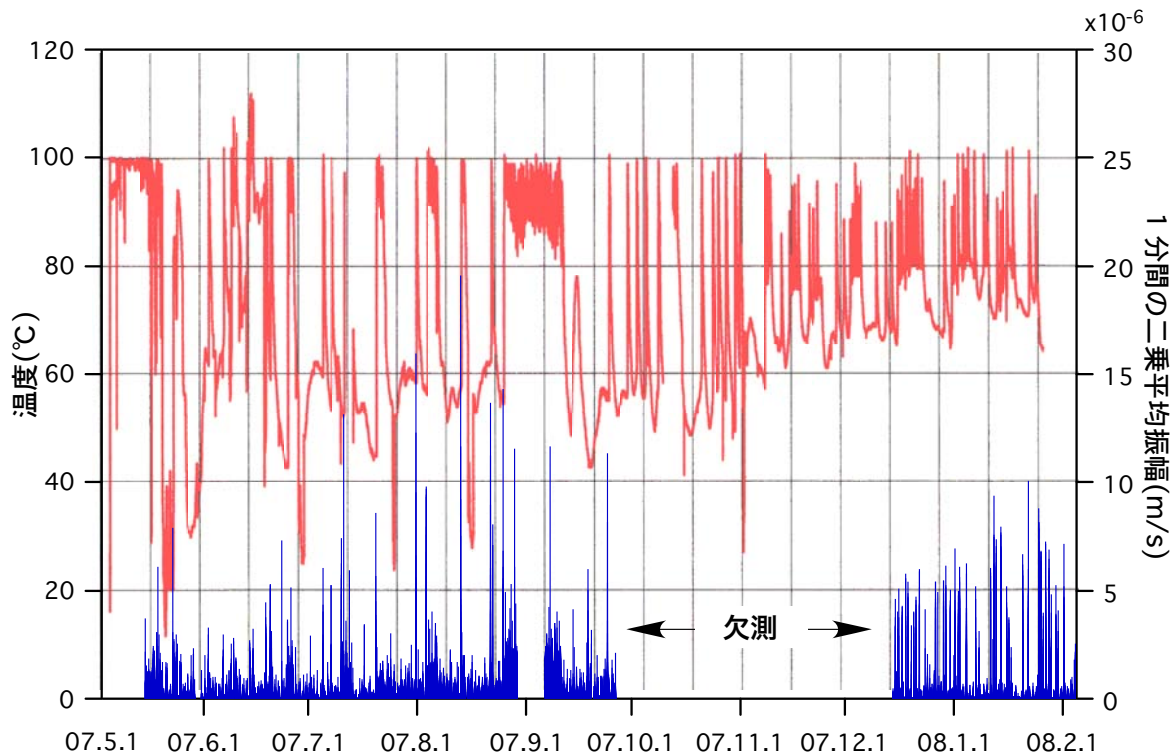


図1. 大正地獄内の熱水温度と1分ごとの二乗平均地動振幅(青)の変化。2007年5月23日以前の温度センサー設置深度は満水面下1m、これ以降は8mである。また12月中旬には大正地獄の中心から10mの地点から20mの地点に地震計を移設した。